彼と僕。

田中カナタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼と僕。

【Ｎコード】
Ｎ６８５４Ｃ

【作者名】
田中カナタ

【あらすじ】
茹だるように暑い夏の日。大学構内での、二人の男性のある会話。

とある大学構内のオープンテラスにて。
「なんだかなーなんだかなー」
「それこそ何だよ。歌なのかよ詩なのかよ」
間髪入れずに言葉を挟む小林。長い黒髪をさらりとかき上げるその仕種は、整った彼の風貌と相まって、絵になりそうな美を醸し出している。
「いやちがうぞコバ。これはとても有意義な言葉なのだ。この言霊は重い重い」
「はっ。この僕を説破するつもりかい？　面白い、やってみたまえ」
コバこと小林はそう言ってアイスコーヒーを一口飲む。砂糖は少なくミルクは多めに。それが彼のセオリー。あと、ストローは使わない。
『なんだかなー』の男、上田は人差し指を不遜にも天に向けて立て、得意げな笑みを浮かべた。そして言ってくる。
「例えば一人で突き抜けている青空を仰いでいる時。或いは誰かがその場を他愛もないオチで締めくくった時。はたまた飲み会で気になるあの子の興味を引きたい時。その台詞をシニカル気取ってニヒルっぽく独りごちてみろよ。そしたら判るだろうよ」
上田は最後に「ふふん」と鼻笑いを付け足した。
しかし小林は苦笑い。
「ふふん、て……上田、意味が判らないよ」
「ちっちっち。コバ。意味はないぜ。意義はあるけどな」
「はぁ」
恐らく、演技くさい台詞は、つまり既存の本であったり映画であったりするものから、丸々そのまま引用してきたのだろう。人の言葉の馬尻に乗っかって満足しているような輩はそれこそ嘲笑されるに然りだが、しかしそこは大人の了見を示すのが紳士というもの。

ここは相手のペースにたゆたうべし。
小林は瞬の間にそれを心掛け、頷きながら相槌を打つ。
「最後のはよく判らないが――――しかし、前の二つは確実に自己満足に過ぎなくないか？」
あと漫画の読み過ぎだろう、と心の中で呟く小林。コーヒーで咽喉を濁す。
それにしても。暑い。
晩夏特有の生温い風が吹き抜けていく。
きっと、それは夏の名残が呼び寄せたのか。
「いや――――」
否定。そして、一秒の幕間。上田の眼。それを小林はみていなかった。
「――――んなこともねぇと思うぜ」
「んん？　あー。そうかい？」
上田がかき混ぜるアイスティーの氷のコロコロという音が、やけに小林の耳内に響いている。
テラス内は静かだった。それもそうだ。残暑真っ盛りなこの時期に好き好んで外に居たがる連中の気が知れない。
おっと。それは僕たちのことだ
小林はシニカルに笑ってみせて、頬杖をついたまま、片眼を閉じて上田を見た。
ストローを動かしている彼。ミルクティーを注文しておいてカップミルクを入れない彼の思考は、付き合いが半年近くになった今でもまだよく理解できていない。
上田には入学して早々に一週間講義をすっぽかした偉業があった。小林と彼が初めてコンタクトしたのはその後のことである。
『ノート見せてくれない？』
思い出せば喚き散らしたくなるようなその記憶は、当然のことな

がら小林の脳内に深く刻み込まれている。そして、それは記憶という過去の知識の枠を越えて現在も、恐らくこれからも、飽くことなく続いていて続いていく。

霞まざるを得ない存在意義。自己観念。次第に諦観。

世界はいつも曖昧だということに気付いたから。そんなことで思い知るなんて僕はなんて歪んでいるんだ。いや、まったく。

一義的に決め付けていた日常。それが四月に錯誤した。剥き出しの矛盾。論理崩壊。倫理崩潰。この空のように幽玄。

いや。それとも有限なのか、この青空は。聳え立つあの入道雲も流されて、いつかは消える。僕のコレも消えてしまえば良いんだ。きっと。

しかし、彼は認識したのだった。早くも五月上旬には諦めていた。コレは事実で現実で確実で堅実なのだ。

「なぁ、上田」
「おお、何だコバ」
「言っていいか？」
「ん……あ、このタイミングか。良いと思うぜ。俺的に」
「じゃ、お構いなく」
「いえいえ」

———コロコロ
コロ———

小林はアイスコーヒーを一気に飲み干した。
黒い禍根と白濁とした想い。
ついでに言葉も濁れば良いのに。そう考えながら。
呟く。

「なんだかなー」

彼はコケティッシュ。
僕のコケット。

僕は、彼に、不埒な感情を抱いている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6854c/

彼と僕。

2010年12月30日20時47分発行